宗像

毎月一日発行
定価 一年 送料共250円
発行所
宗像大社社務本局
福岡県宗像郡玄海町田島
電話 神湊２６番

宗像大社放生会

―境内を埋め尽した露店と人の群れ―

十月一日より三日までの三日間当大社秋季大祭（宗像放生会）が盛大に斎行された。前日より三日まで秋晴れのさわやかな天候に恵まれ、境内は文字通り人の波で賑わった。

○前日より郡内総代さん方の奉仕によって拝殿から摂末社に至るまで提灯が取り付けられ、〆縄が張りかえられた。社殿のみす、幔幕も新しくなり、社頭は面目を一新した。

○一日、午前八時、轟然と鳴り響く花火三発を合図に祭典が斎行された。

先ず午前八時半に高宮祭が執行され、午前十時総社祭が執行された。静まり返った神殿から響き渡る楽の音につれて、主基地方の風俗に因む風俗舞と、氏子中の中学女生徒による浦安の舞とが優雅に舞われ、引続いて高野玉嵐氏による筑前琵琶の奉納演奏があった。参列者が耳を澄ます中を、或いは高く或いは低くかなでられる「宗像大神讃歌」が厳かに続いた。高野氏は当宮特信者の一人で、氏の創作による「常陸丸」「宗像大神讃歌」は曽て中津宮神前及び大島にある沖津宮遥拝所に於て演奏せられたことがある。

斎主の祝詞奏上に次いで、氏子代表庄村会長の氏子献幣があった。献幣使の正装をした庄村会長の冠の緌（えい）も感激に打ちふるえていた。参列の宗像神社復興期成会代表出光泰亮氏も緊張の面持ちで玉串拝礼をされた。

又、宗像会を代表して中間市宗像会が団体参拝された。境内には露店が立ち並び、見世物小屋や農機具の臨時展示会場等も設けられて、午後からは人の波が陸続とつづき、この為東参道附近からは諸車通行止となった。この為普段祈願に拝殿前まで来る車も東参道附近に駐車してお祓いを受けていた。

○二日、晴天に恵まれ、気温も三十度と云う真夏を思わせる暑さであった。古くからの習わしで、この日は官公衙を始め、郡内すべて休日の為、境内は混雑の極に達し、迷子が出るやら、連れの人にはぐれた人が出るやら、清明殿に詰めかけた宗像警察官も汗だくで処理に当った。

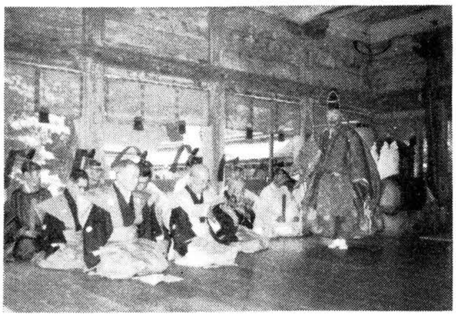
境内の警戒に当った地元消防団、湯茶の無料接待にあたった敬神婦人会もてんてこまいの忙しさであった。

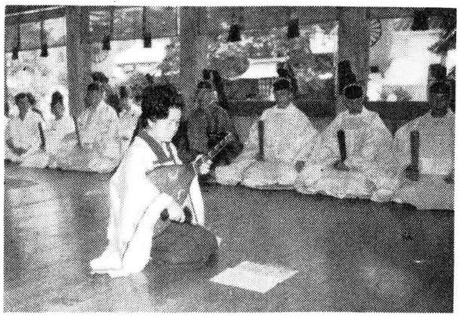
祭典には、古式ゆかしい伝統の翁舞が守島善郎氏外の方々によって演ぜられた。境内では郡内中学校対抗相撲大会がひらかれ、五中学から選ばれた少年達が熱戦を繰りひろげ、近郷からつめかけた参観者を喜ばせた。

三日間の参拝者は十数萬にのぼり、近年にない人出であった。

今年の放生会大祭は例年よりも少し違った所があった。形に現われた所では何も変化はみられないが一般の心構えが違っていた。というのは、去る九月二十三日に「御生祭」を盛大に斎行して、郡民の、特に宗像七浦漁民の総奉仕によって実質的に沖津宮様と中津宮様とを辺津宮にお迎えしたという意識が然らしめたものであろう。

「今年の放生会は三宮お揃いじゃけんのう」という声が何度も聞かれた。露店の数も昨年を上廻り、参拝者の数も昨年を四割も上廻った。





宗像大社御用達

神輿 祭具 装束

松島神輿製作所

京都市下京区北小路通新町西入
電話(37)八八六九番
振替口座京都一五八九一番

御　礼

当社の秋季大祭にあたりましては種々御高配を賜り、ここに厚く御礼申し上げます。

昭和三十七年十月吉日

宗像大社社務本局

KBC（九州朝日放送）、出光興産、夕刊フクニチ、ニビシ醤油、日本マカロニ（株）、協和醗酵工業（株）、朝日麦酒（株）、淵上デパート、大丸、岩田屋、玉屋、因幡町商店街、新天町商店街、勝屋酒造（株）、鷲頭酒造（株）、吉野屋酒造（株）、中村酒造（株）、豊村酒造（株）、伊豆酒造（株）、交安亭、宗像タクシー、県漁連宗像支所、鎮国寺、神湊漁業組合、鐘崎漁業組合、津屋崎漁業組合、大島漁業組合、桂浜漁業組合、地島漁業組合、魚屋、宮司丸、春日丸、祐宝丸、更生丸、沖津丸、第五沖ノ島丸、朝日丸、大和丸、協栄丸、海幸丸、沖一丸、栄幸丸、新幸丸、大島丸、八坂丸、行生丸、豊丸、福吉丸、あけぼの荘

関係各位殿

論説 ＝ 交通安全旬間

以下は、去る十月十一日、宗像大社社務所に於て開かれた「宗像郡交通安全協会理事会」に於ての権宮司の挨拶を筆録したものである。

秋の交通安全運動旬間にあたり、皆様が神前に於て祈願祭を行ない、引続いてこの会議を持たれた事に厚く敬意を表すると共に又有難く御礼申し上げます。

さて先頃、当社の若い職員が五、六名免許証を交付されたのでありますが、その時に宗像警察署の重松署長の言葉に

「この免許証を皆様にお渡しするのは、私にとっては身を切られるようなつらい思いが致します。何故なら、皆さんは此の免許証を持ったばっかりに交通事故を起こすかもしれないからです。若しも事故を起こしてその結果生命を失うことがあれば、私は皆様に地獄行きの切符をお渡ししたことになります。本当は試験に合格された皆様に、〃おめでとう〃とお祝いを申し上げるべきところですが、今申し述べたことを考えると私は交通事故者を製造しているようで、そこの処が何か割り切れないのであります。」

とこういう風に述べられたそうです。取締りの衝に当られる方としては当然の感慨でありましょう。又、この署長さんは曽て「宗像」の五月号に論説を寄せられ、この様にも申して居られます。

「朝起きたなら敬虔な気持で今日の安全をお祈りし、感謝のこころをもって運転に従事してもらいたい」

この言葉を此の秋の交通安全運動旬間にあたって今お集まりの皆様に改めて思い出していただきたいと存じます。国土が狭く、資源が乏しい、財政が思うようにならない等の事情から、道路と交通施設の整備が追いつきません。一方益々増加する車輌とのアンバランスのために、交通問題は単なる社会問題であるばかりではなく、国家の大きな政治問題として取り上げられている現状です。どうして交通事情を緩和し、交通事故を防ぐかということは、今申し上げました状態からは決して名案は生まれません。いかに取締りを強化し、いかに罰則を重くしても効果はありません。要は「心」の問題であるからです。何時でしたか、優良運転者表彰式の席上で或る運転者が「家族の写真を運転台の何処かにつけて置く」というお話がありましたが、それも一案と思います。運転者が、運転をするのは自分一人の為だけではなく、家族の為、事業体の為、ひいては国家社会の為に働いているのだという自覚を持って貰いたいと思う訳です。宗像大社は全国でも最高の交通安全の守護神でありますが、最近は殊の外御祈願の車が増えております。いかにこれらの人々が交通の安全を願うかが知られる訳でございますけれども、反面を考えますとそれだけに交通事故の多いということが考えられます。御神徳の然らしめる所とはいい乍ら、交通安全祈願数の多ければ多い程その反面の影響もある事を考えますと、一寸複雑な心境にならざるを得ないところもございます。皆様、神門の右側の「交通訓」をごらんになりましたでしょうか。「安全運転心で運転」としるしてございます。大社では御祈願に見えた人毎に、出来るだけ安全運転についてのPRを致して居ります。前にも述べましたように、宗像警察の署長さんのいわれる通り、安全運転は「神に安全運転を誓う心」から生まれます。法律があるから、又は罰則があるから安全運転をするのではなくて、運転者自身の心の持ちようが最大の眼目となります。取締りに当られる当局の方、それに協力される安全協会の皆様と、大社は表裏一体となって進んで行きたいと思いますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。本日、大社の社務所を皆様の大切な会合の場所とされたことも大層意義深いことでございます。どうぞよろしく御審議の程、お願い致します。

阿蒙少言

先頃ある文芸評論家なる人物の忠臣蔵批判を見て驚いたことがある。映画演劇の台本や構成、或は俳優の演技等の論功ならこの評論家の観察がどのように盛られていても、さして意に留めないが、義士一統の史実そのものを馬鹿殿様の愚行に始まる悲劇と論じ、術策を弄して喧嘩相手を殺した大石は日本人好みの竹を割ったような熱血漢ではなく、やくざ者の仕返しに異らぬおろかしい行為だと。例の如く進歩的文化人を気どっての道義抹殺論は鼻もちがならない。よくもこんな評論を新聞雑誌が取り上げるものだと感心する外ない。○ある日曜歌壇の選評を読む。荒けずりで粗雑だ表現にやさしさを加えよとあり、技巧が過ぎて道具がととのい素朴さがないとあり。天狗歌人は何とか言わねば先生の看板が値うちを下げるとでも思っているのか、他人の労作に頼まれもしない加筆をするほど間抜けはない。○自由に詠ませてみよ、のび〳〵と自己の所懐を歌わせてみよ。下手でよい、いや下手がよいのだ。上手な歌を作ろうとあせるような歌人にならぬがよい。○大会社の運営に至妙の手腕を発揮し、期待の通り、その事業を繁栄させる指導者には身につけた社長学がある。この社長学は卒業証書欲しさに好きでもない学科に眠気目をこすりながら聞く講義の中にはない。順風満帆望み通りの出世街道を平穏に歩いたサラリーマン生活からも学び取れない。旺盛な責任感と不撓の努力と綿密な計画を基礎にして所謂実戦場裡に血肉となって身についたもの、それが事業を大成させる社長学であろう。町村長学も校長学も皆同じと言える。（白雲）

第十九回　宗像大社献詠歌会詠草

十月十四日於社務所詠草到着順

田島　滝口主米蔵
雨過ぎし森の梢の葉がくれにあらった様な仲秋の月

戸畑　田中ハツセ
木陰にてスケッチ始めし子を追うて秋陽まぶしく画面に反射す

福岡　江崎　琴子
見る人のこころ〴〵にうつるらんこよひの月にひとりたゝずむ

宮田　片山　朔子
子等と干すビールの泡の耀きに未来につながる倖をもつ

内浦　長畑　房江
法師蝉終りの声と秋彼岸彼方ゆ此方ゆ啼きしきる声

吉武　高山徳七郎
天高く酪農の里に草あふれどの家の牛も丸丸と肥ゆ

江口　辻野　開造
いつまでも神秘のなぞにあれかしと月見る毎に思ひこそすれ

吉田　占部　由久
ここかしこ釣人見ゆる野の川の岸辺いろどり曼珠沙華咲く

戸畑　花田　道子
秋虫の音色きゝつゝ高台で提灯山笠を若戸大橋に見る

勝浦　永島　計七
布団干す浜の旅館に客さびれ波の色にも秋深みゆく

福岡　林　まつえ
さがせども北斗七星見あたらず目うすくなりしを知りて家に入る

原町　中村　ゆき
蛇からはにはとこ草にからみいて夕の風に飄々とゆれる

吉武　立石　昇
去年挿しゝ無花果の芽の我が背丈はるかに越えて大き葉をつく

東郷　藤崎　辰子
針運ぶ想ひやつれて紫陽花の色終りけり雨の狭庭に

津屋崎　麦野　時雄
純白の底に濃紅つけて咲く木槿の花はわきていとほし

宮田　北原きみ子
台風の来るとし聞ける老いし母茄子の杖立急ぐと告ぐる

戸畑　山磨　昌子
幼き日山に手折りし秋草をたむけて団子食みし名月

村山田　吉田佐一郎
秋の田の稲の垂穂の美しき一株毎に握り試しぬ

勝浦浜　永島　文子
河童連よく遊ぶらむ若戸橋火野文学のかっぱの故郷

宮田　片山　一
朝日さし君の賜ひし茄子トマト光の中に紅と紫

吉武　金丸　柳蔵
むきむきに草食む牛にたち交り仔馬ら遊ぶ高原の朝

戸畑　伊規須ゆき
教科書を中に対き合ふ母と子を蚊帳ごしに眺め寝ねしを知らず

東郷　安部　静子
山荘の賤が伏屋も秋深み庭にコスモス柿も色づく

深田　中野　節子
木犀の香に顕ち来れば放生会の甘酒麴我もたのみゆく

香椎　桜井　秀
遠くより何かが吾を呼ぶごとし懐ひ結ぼれ幾日経し夜を

〃　桜井　ツ子
こころ燃やすもの今はなく木犀のそこはかとなき秋を愛しむ

福間　岩崎　和荘
虫の声戸外できゝつゝ十三夜親子たのしく栗の御茶のむ

吉武　立石ろせの
蝉の声きこえずなりし樅の木の梢を鳴らす秋風の音

福間　井原　元彦
千年の大樹寂かに睡むるなか奥入瀬川の溪流はやし

神湊　隣船　俊
墨染の衣に秘めし凡悩を静かに堪へて南無観世音

名残　竹原　円
還暦の吾をとりまき子供等も酔ひて帰りぬ鈴虫のなく

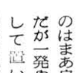
京都　鈴木日出年
夕かげる貴船の床に吾酔ひてうつゝなく聞くひぐらしの声

福岡　高橋　昇
焼石に水やる心親心愚なるこそ誠なるらん

田島　小野　迪夫
神送る大船団の旗なびき鐘の岬をゆっくりめぐる（御生祭）

田島　久保　輝雄
めざましや百色の幡馳せ集ふみあれのまつり海をおほひて

宗像談話室　放屁論



讃岐の金刀比羅宮の文化財の中に冷泉為恭の筆になる「放屁論絵巻模写」なるものがある。鎌倉時代の貴族の手すさびにしては諧趣のあるものである。頭巾だけを被った数名の男たちが或いは寝た恰好で或いは這いつくばった恰好で、又或いは立った侭でさまざまな恰好で放屁している図である。仔細に見ると横向きに寝た男が屁り上げた屁を立っている男がまともに吹きつけられて、これも放屁しながら鼻をつまんでいる処、這いつくばった男が片手に扇子をかかげてもう一人の中腰で放屁している男にその扇子を吹かせ、自分は相手の中腰の男の外れた褌を吹き上げている処、その交叉した放屁線が両者の尻から鮮やかに出ていて面白い。又すぐそばで這いつくばっている他の男はその交叉線目がけて一線を入れており、その腹がふくれている所を見ると思い切り屁の素を仕込んでいるらしい。その右側に立っている男は左手に扇子右手に放屁の的?らしきものを持って大口をあいて笑っている。更にその右手には完全にのびて寝ている男がある。放屁づかれか、又は放屁合戦にアテラレて悶絶したのかはしらないが、全体的に自由な毛筆の線描きの図柄はすでに軽妙さを通り越している。

「放屁」には世界中に共通のムードがあるらしい。曽て「士と兵隊」という映画を見たことがある。斥候か何かの小部隊が夜間物陰にひそんでいる時に誰かが一発やる場面があった。生死を目前にしての「余裕」ともいうべきか。あとでこの場面について外国の軍人が大いに共鳴したということを何かで読んだことがある。西鶴の好色物の中か何かで、客が遊女と寝たところが遊女が一発すかした。遊女すかさず白足袋の足を出して「沖の暗いのに白帆が見える」と布団の中の空気を抜くのと客の注意を外らす為に云った処が、客曰く「肥舟じゃろう」。こんなのを臭い仲というのかもしれぬ。

古今著聞集の何処かに、或る貴族が女の所へ通った。女が嬉しさの余り抱きつこうとした時にどうしたはずみか一発出た。女は真赤になる。男は憮然として引き揚げる。遂に結ばれなかったという。こんな場合の一発は同じ一発でも愛嬌がない。運命のいたずらとはいえ罪な話である。

さて、或る老人曰く。

「一発やらかして「あら」といって真赤になる年頃の女というものはまあ良い。だが一発やらかして置いて、平然と「どうも」というようになると一寸いただけない。ところが女も年を取ると陰にこもった様なのをやらかして置いて何とも言わず、かえってこちらをじろりと睨む、なんてのはとってもいけません。処がまた上がある。男も顔負けするような勇ましいのをやらかして置いて「あゝ、すうっとした」というようになるともう甲羅に苔むした様な感じがして、幻滅もその極に達するものといわなくてはならない。元来屁というものには一つの表情というか何というか何かの気分を表現するものらしいが、女の古くなったのが遠慮なくやらかす様になったらお終いですな」といってから老人「これは決して私の家内のことではありませんから誤解のないように」と大真面目に付け加えた。

槃臛秘抄に女の盛りなるは、十四五六歳廿三四とかや、三十四五になりなぬれば、紅葉の下葉に異ならずと見える。昔は女の盛りが早くから始まったらしいが、女と屁の関係を考え合わせると女の色気について昔の人はよく言ったものだと思う。

世の中は広い。屁の道場があって音色と気品を学ぶという。そして挨拶万端をその音で片附けるというから恐れ入る。男女同権、そんな道場にも「女丈夫」がいるかもしれない。

吹けば飛ぶ様な屁の話でも事は重大である。屁をしない人間は絶対にいないのですからね。

中津宮の秋まつり

十月十二、十三日の両日恒例の中津宮の秋祭が斎行された。前日迄の嵐が収って当日は絶好の秋日和になった。

十二日午後五時、岩瀬にある沖津宮遥拝所に於て宵祭がとり行われた。珍しく沖ノ島様がくっきりと見えた。

中津宮境内に於ては午後から夕方にかけて「奉納角力大会」が行われた。小、中学生の部落対抗戦である。小さい大鵬や柏戸が歓声に応援されて土俵狭しと戦っていた。午後七時中津宮宵祭斎行。夕刻から点灯された中津宮神門から参道の下まで両側にさげられた奉納提灯の列が美しかった。

明くれば十三日、殆ど無風の穏やかな秋日和。

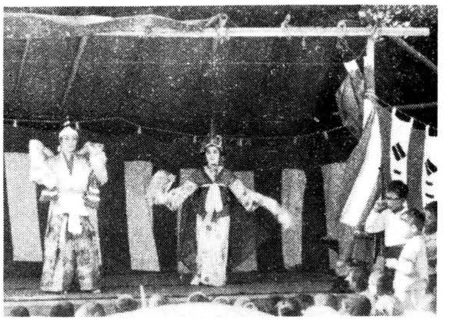
九時、沖津宮遥拝所大祭斎行。沖ノ島様は秋陽の中に霞んでかすかに拝めた白帆の漁船が沢山海に出ていた。

十一時、中津宮祭典斎行。

郡中からかけつけた総代さんや特信者で社前が溢れた。終って社務所に於て直会。権宮司から

「今年の放生会には、去る九月二十三日に沖津宮様と中津宮様の神迎えの行事を行った処、全国一の大船団による祭典が出来ましたことは皆様御承知の通りであります。こゝに厚く御礼申し上げますと共に、宗像大神に対するあの様な信仰の心をお寄せ下さる郡民の姿を見ることが出来ましたことを皆様と共に喜びたいと思います。次いで行われた田島放生会にも今年は参拝者数が昨年の四割増しであったことも御生祭を契機とする信仰の盛り上りと見ることができると思います。」

大体以上の様な謝辞が述べられた。境内では午後から特設舞台で芝居が演ぜられ、終日賑わった。



十一月祭事表

一日　月次祭　午前十時

三日　文化祭　午前十時

もとの明治節にあたり、明治の盛代を同顧反省して国家興隆を祈念する。

十五日　月次祭　午前十時

二三日　生産感謝祭　午前十時

神社では、この日の祭が新嘗祭にあたる。新穀をお供えして今年の豊作を感謝し、あらゆる産業文化の振興を祈念する。

十一月の交通訓

○事故は忘れた頃に来る

宗像大宮御生祭

隣船寺宗俊謹稿

神勅社頭渡港東　御生祭典仰弥崇
遐興海蹲因古儀　鎮護国家宗像宮

同献茶祭

宗像大宮拝殿前　均頭滴々即対泉
荘厳清寂献茶祭　一向沸湯境地天

境内に水銀灯輝く

懸案の水銀灯三基(各五百W)がこの程完成して、夕刻より境内を明るく照っしている。

これは、東京温泉社長許斐氏利氏、京都の特信家、西鉄、西銀、福銀の暖かい御援助に依ったものである。

大提灯奉納

博多の平楽寺櫃雄氏のお世話で大提灯が一対奉納され、放生会参拝者の目を奪った。

奉納相撲大会

放生会のなかの日(二日)郡内中学校対抗奉納相撲大会が当社境内相撲場に於ておこなわれた。参加校は五中学十チーム、総勢百四十名余りで、放生会に集まった大勢の参詣者の前で火の出るような戦を展開した。

午前十時に郡体育連岡田会長の開会の挨拶があり、次いでKBC中津留代理挨拶の後、土俵抜いが行なわれ、先ず団体戦から幕は切っておとされた。

行司の先生が軍配をかえす前に相手を一気に、土俵外に押し出す者や、体格が非常に異なる者が対戦して、寄られる処を土俵際でこらえ、うまく相手をうっちゃる等好番組が続き、一番〳〵がかたずを飲む試合ぶりであった。又それぞれの中学に地元の応援が盛んで郡内中学対抗の面白さがあった。

かくして熱戦が続き、午後二時半無事終了した。

大会成績次の通り

団体の部

優勝　津屋崎中学校
二位　福間中学校
三位　玄海中学校
三位　中央中学校

個人の部

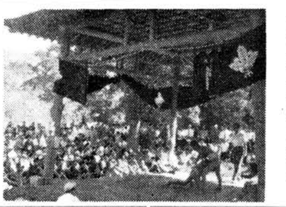
一年
一位　釜瀬　計(中央中)
二位　高橋正文(玄海中)
三位　森　清美(津屋崎中)
三位　山田輝行(津屋崎中)

二年
一位　浄見　学(津屋崎中)
二位　吉武　寛(中央中)
三位　浜　清(津屋崎中)
三位　福原憲治(城山中)

三年
一位　藤井朋明(福間中)
二位　花田喜治(津屋崎中)
三位　門司義伸(城山中)
三位　本田喜久雄(中央中)

これら優勝校、優勝者には、出光興産、KBC、夕刊フクニチからカップ、楯等が贈られ、又、地元の三浦文具店、及び吉武儀一郎氏の骨折りで、今年は特に露店商組合からも学用品の寄贈があった。当社宮司相談役麻生藤市氏のお世話で博多の各商店街、各デパートから鉛筆、ノート等の賞品が参加賞として贈られ、中学生を喜こばせた。

終りに、特に休暇を返上して奉仕して下された各中学の先生方並びに、数々の御援助を下された関係各位に厚く御礼を申し上げます。



琴の奉納演奏会

十月四日の午後から社務所に於て奉納三曲演奏会が催された。出演は地元の愛好者二十数名、夕刻迄和やかに約二十曲が演奏せられた。主なる曲目は、「末の契」「秋の調」「軒の雫」「小鳥の歌」「秋の草」「比良」などの他「コスモス」「狸の泥舟」「水滴」などの童曲に至るまで多彩な内容で聴衆を楽しませた。

社務日誌抄

九月二十日　御生祭竹切総代奉仕す。

九月二一日　麻生産業社員、出光タンカー(株)取締役門田盛義氏来社。宗像警察署柔道試合必勝祈願の為一行十数名来社。

九月二三日　みあれ祭斎行、六百年ぶりに古儀を復活。

九月二四日　露店地割前の杭打す。

九月二五日　露店地割り、神社より職員一名立会う。

九月二六日　相談役麻生氏博多より神賑行事の賞品を持参して下さる。

九月二七日　東京三友海運専務外三名特参

九月二九日　田島総代放生会準備。

九月三十日　御生祭、地主祭斎行

十月一〜三日　秋季大祭

十月四日　三曲奉納演奏会

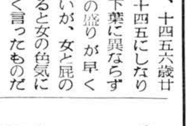
十月五日　表千家千宗左献茶祭

十月六日　職員五名佐世保日章丸奉遷祭に出向く。中津宮御嶽山御遷座

十月七日　田島小学校運動会に大社剣道部出場す。

十月九日　田島校区敬老祭執行清明殿にて農協主催映画会

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話東郷27番



鐘の岬(かねのみさき) (11)

山下半可　作
深田無庵　画

修羅(三)

草摺りの長い緋縅の鎧をざっくりと着、鍬形を打った五枚甲の兜を猪首にかぶり、熊の毛鞘の大太刀を吊って、紫の厚房をつけた五才毘毛に跨っている。

ちょっとの間宗像勢の進撃を牽制するような恰好で、わざと悠々と立ちふさがると、あぶみを踏んばって突っ立ち上り

「吾を誰とか思う。打ち物取って豊後に名ある奴留湯新左衛門という者なり、誰かある。出会うて見参せよ」

大音声をあげてはったと睨み廻した。此の時

「おう」

といって宗像勢より馳け出した者がある。

誰かと見れば、これぞ宗像家四天王の一人吉田守致という当年十八才の若者である。

大宮司の旗本から一散に馳け出した守致に敵味方の目が一せいにそそがれた。藤縄目の大鎧に南蛮鉄の籠手脛当をつけ、逞しい黒馬に跨って矢の様に奴留湯のもとへかけつけた。

「吉田守致」

一言名乗るや否や斬りつけた。しょう然と太刀の打ち合う音がした二合三合、と、無念!守致の太刀が折れた。

これを見た奴留湯が、何と思ったか自分の太刀をがらりと投げ捨てた。次の瞬間、大手を拡げた二人が取組んで馬から落ちた。上を下への格斗が続いた。一旦は奴留湯を押えつけた守致は、何のはずみか奴留湯に蹴返されて傍らの溝に落ち込んだ。奴留湯の力が勝ったのか運がよかったのか、組み敷いた守致の兜のしころをまくり上げて匕首の抜く手も見せずに首を掻こうとした。ここに奴留湯の一寸した油断があった。寸秒の間、それより早く鎧通しを抜いた守致が奴留湯の下腹を突き上げていた。二突き三突き、どっと溢れ出た血潮が守致の顔にかかった。

「うおーっ」

断末の叫びと共にのけぞった奴留湯の下から素早く飛び起きた守致がすかさず奴留湯の首を掻いた。全身に返り血を浴びた若武者の手に敵の首が高く差し上げられた。首尾やいかに、と此の時まで鳴りを静めていた敵と味方から思わずどっと声があがった。

時を移さず興氏の采配が振られた。再び宗像軍のときの声が揚った。

「右へ逃げろーっ」

どこかで叫んだ声がした。その声も敵の声か味方の声かわからない。灼熱の太陽のもと、散を乱して逃げ惑う大友方の軍勢、これを挟み撃つ宗像と名島、志賀島等の兵士らの叫び声が暫く続いた。

その乱戦のさ中、宗像家の楢の葉と小早川家の左三ツ巴の旗印とが相会した。遠賀川の川口にある岡の港(今の芦屋)に逆上陸を敢行、土地の豪族山鹿の城主麻生近江守の手勢を糾合して宗像の援軍に馳けつけた名島、志賀島の総大将は、ほかならぬ小早川秀秋であった。

乱戦のさ中に、自らも十三人程斬り捨てたであろうか、秀秋の全身に返り血がしぶいていた。興氏と秀秋の手がしっかりと握り合わされた。

「大宮司どの」

「おう秀秋どの」

握り合った二人の手にぐっと力が入り、互いの目頭がチカッと光った。

この時の合戦により宗像側では援軍の大将許斐氏則をはじめ一千四百余名の貴重な人命を失ったが、一方大友方の損害は総勢約七千のうち半数以上を失ったといわれる。晩年の宗麟にとって、この時の宗像侵略は終生忘れ難い思い出となったに違いない。

晴気(一)

天正九年六月の或る日の大宮司邸で

「どうじゃな、姫の具合は」

興氏の前には石松和泉守、吉田飛騨守の二名が平伏している。この二人は伽羅姫の養育係を兼ねている宗像家の重臣である。

「梵鐘沈没以来、姫までが沈みおって、揚句は寝込んでしもうて!、去年は放生会を目前にして一と合戦してしもうた。小早川どのや阿曇どのにいかいお世話になったが、そのお陰でどうやら事無きを得たものの、数多の遺族に対する手当てや後仕末に忙しい日を送っているうちに、姫のことをとんと忘れておった。わしは、今では沈鐘のことなど何とも思うとらんが、どうじゃな、この辺で秀秋どのとめあわせようと思うが」

「はっ、ありがたき仕合せ」

「なんと?」

「はい、医師も原因不明と申しましたる姫君の気うつの御病いも、去年の戦勝以来漸く晴れ、近頃では時々おしのびで御社へ参詣なされておられまする。殿!」

「なんじゃ」

「どうやら世の情勢も小康を得ましたる今日、この秋にでも婚姻の儀いかがでござりましょうや」

(つづく)

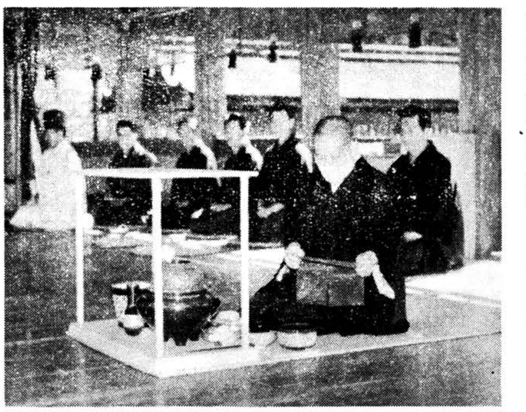
盛大に献茶祭！

―表千家家元がお点前―

去る十月五日、当社拝殿で盛大に献茶祭が行われた。これは出光興産社長出光佐三氏の格別のお世話によって実現したもので、表千家家元即中斎千宗左氏が京都よりはるばる奉仕の為来社した。この日午前九時頃から、九州、山口辺からも同門会の会員が約千人、貸切バスでぞくぞくと見え始め午前十一時頃には、境内は美しい振り袖姿の御婦人達によって埋められてしまった。

午後一時から祭典が斎行され、お弟子さん達が見守るなかで、家元が静々と進み出て、四本柱の台子に据えられた風炉の前に坐り、切火を継ぐと、茶釜がえも言われぬ音を響かせた。そして袱紗さばきも静かに香りのたかい濃茶、薄茶を各一わんづつ立てて、神職がこれを神前にお供えして祭典は無事終了した。この後社務所及び清明殿で副席が設けられて、会員一同秋の日射しを楽しみながらかをり高いお茶を満喫した。

この日、出光興産社長出光佐三氏、仝監査役出光泰亮氏、仝九州支店長江崎浩正氏、進藤慎太郎代議士、玉屋百貨店社長田中丸善八氏等関係者多数が参列した。



千宗左氏は高宮を特別に参拝の後帰路につかれた。

出光佐三氏は祭典後、田島小学校で約一時間に亘って講演された。

本日の茶会の席上で出光社長が「物質文明発達の結果、外国では睡眠薬を必要とする様になったが日本では昔から茶道、華道、香道のような鎮静剤的な「道」がある。静心を養う道としてこれ等を発達せしめた。民族の智慧を外国人は見直さなくてはなるまい。」と述べられた言葉が印象的であった。

☆……☆……☆

消息

拝啓　朝夕はめっきりと涼しくなりましたがその後皆様には御変りなきことと存じます。さていつもながら月刊宗像誌を送付戴き有難とう御座います。御陰様で懐かしく拝読して居ります。処で誌上にて始めて宮司様の入院の件を知り驚いて居ります。誌上では怪気炎をあげておられますので多分大丈夫だとは思いますが、皆様によろしくお伝え下さいませ。小生御無沙汰致しておりますが至ってのんびりと都会生活を送って居ります。宗像放生会も終り一段落と云った処でしょう。では時節柄御身体を大切に

（東京）宮木吉治

拝啓　菊の香ただよう好季となりました。御一同様には愈々御健祥の御事と遥にお慶び申し上げます　毎月「宗像」御恵送下さいまして有難うございます。いつも色々と教えられる点も多く有意義に読ませていただいております。又貴社の様子なども懐しく存じます。白製先生の怪気炎は痛快に拝読致しました。今後共一層の御発展をお祈り申し上げます　敬具

（奈良県）小方益臣

拝啓　時下秋冷の候御一統様御元気で御活動の趣およろこび申し上げます。当地方では今年は例年に比して非常に涼しく凌ぎよい夏でした。昨今では朝夕少し冷える感じでございます。久しい間御無沙汰をして申し訳ありません。毎度なつかしい「宗像紙」を御送付に預りまして厚く御礼申上げます。福間町出身の綱脇正光氏が二カ年前帝国人絹より研究生としてペンシルヴァニア大学で勉強する事になり研究を続けて居られましたが本年八月農学博士号を得られまして欧州諸国を視察して九月下旬郷里に帰られる予定になっていますので既に御帰郷の事と想います。養老院緑風園の記事が宗像紙にありましたが立石氏の案によるものらしく全国的に有名な正助さんを想像する武丸にされた事は何か深い因縁がある様に思われます。在米五十年デモクラシーの空気を吸って来た私には終戦直後デモクラシーが布かれる事を知りました時に年老いた人々の保護法を先に講じて置く可きだと論じました。昨秋帰郷いたしました際第一番にこの事を尋ねましたところ、其当時宗像町の経営で私の義弟瀧口君が緑風園の世話をしている事を知りまして瀧口君の案内で園内を視せて頂きました。なかなか小規模でありますがすべてが完備していて米国では見られない気持が味われまして園内の人々も仲睦じく楽しきところでした。宗像町の唯一の誇りであり、生みの親が立石氏であり非常に力強く感じました。以上は訪日の中で最も深い印象の一つであります。時節柄皆様折角御自愛下さい。

（在米、カルフォルニア）中村次郎平

役場を訪ねて (1)

＝玄海町の巻＝

玄海町役場は宗像神社のお膝元田島にある。もっとも合併以来まだ庁舎の位置が決定していないから仮庁舎であるが、本館と呼ばれている建物は、田島村時代の役場がそのまゝ使われている訳で「文化財」の異名をとる程古い。明治三十二年頃のものだから、すでに五十数年にもなる。

本庁舎は、いまの本館の他に昭和三十二年建築の新館と、田島農協の旧購買部が第一分館として使われているのと、第二分館として、会議室専用の建物の四つからなっている。現在の処三役以下五十五名が、一万四百の住民の行政にたづさわっている訳である。

機構の方は、総務課、税務課、住民課、経済課、土木課の五課に、教育委員会と農業委員会の事務局、それに会計室がある。

役場も昔と違って住民へのサービスが第一、それに窓口事務のスピード化も要求される。昔なら戸籍抄本一枚書いて貰うのに、どうかすれば半日も一日も待たされる事があったが、今は、リコピーとやらがあって、ものの一分もすれば、原本と寸分違わぬのが出来上るから便利なもの、それだけではない、一世帯の事に関してはビジブルコーダーと云う一連式の書庫があって、その世帯の事に関しては全て分るようになっている。家族構成はもとより、保険、年金、税金その他一切一目瞭然と云う方式がとられている。こう云った事が事務の能率化の現われであり合理化である。最近各町村とも機構改革に乗り出している事は周知の通りである。本町も住民課を設けた事もその一つであるが、とに角窓口を一本化しようと云うのである。戸籍については、戸籍係へ、移動証明は経済課へ、どんな用件でもその課の係員の所へ行かなければわからない。こんな不便な事務機構を改めて相談室へ行けば用件は片付ける事が出来る。これが即ち機構改革であるが、本町もやがてそうなるであろう。

役場の仕事も云いかえれば、雑貨屋である。道を作ったり、橋をかけたり、議会運営事務や有線放送の交換室、地島への渡海船、税金、保険、年金、生産の促進、農地の事から、戸籍や、火葬場、伝染病院もあるし、いざ火災に備えての消防事務、これに大切な教育がある。学校は一つの中学校に五つの小学校二十八の公民館、その間には、こざこざしたものも随分あるし、年中あれやこれやに追われ通しである。あんまり自慢する程の町ではないが、それでも、一台の乗用車と三輪車はフル運転だし、消防自動車六台分の維持管理も容易ではない。各支所（神湊、池野、岬）の維持費から、有線放送の修理も多い。その他、役場もはたで見る程楽ではない。

玄海町役場は、スポーツでは可成り知られている。町村間の試合だが、ソフトは今年も優勝しているし、野球、排球もいつも各チームからマークされている。又ブラスバンドは玄人顔負けの腕前だから多士済々と云えるかも知れない。まだ書き足りない点が多いようですが、紙面の都合もあり、あとは又何れの機会にゆずります。

玄海ゴルフ場建設起工祭

暖かく晴れ上った十月十九日、玄海町江口に開設される「玄海ゴルフ場」の建設起工祭が行なわれた。場所は正確にいうと玄海町江口の五月浜と吉田部落の中間を占める丘陵地帯で、面積約二十二万坪（周囲約四ＫＭ）ある。全地域が砂丘で海岸地帯特有のバラバラ松が青々と続いている。北に玄海、東に四塚連山が遠望できる絶好の場所である。

十時、宗像大社より権宮司以下、五名の祭員が到着、高処に準備された神離に対して厳粛な祭典が行なわれた。西日本開発株式会社の菅浦一社長の手による刈初めの儀をはじめ、「穿初」「杭打初」の儀が滞りなく済み、同社関係者、施工の新菱建設、玄海町の関係者が本事業の順調な達成と地元の繁栄を祈って夫々玉串を奉奠した。

祝宴の席上、菅社長の謝辞と地元の協力を懇請する挨拶があり、高橋町長、中野議長の地元発展の端緒たらしめたいとの挨拶があって、乾杯が交わされた。全国一のゴルフ場完成によって、宗像郡の新名所が出現する日も近い。

神湊戦没者慰霊祭

去る九月二十一日、午前十時より戦没者慰霊祭が神湊小学校で斎行された。これは玄海町主催のもとに毎年執行される神仏合同の慰霊祭で、神式を代表して当社職員が赴むいた。

祭場には、遺族凡そ百名余りが参列し、海軍少佐日名子留吉外八七柱が斎られ、玉串を奉げる遺族の手もうちふるえていた。

宗像郡畜産品評会開催

十月十一日午前九時より宗像町東郷の郡家畜市場に於て、郡内農協組合長会及び郡畜産農業協同組合共同主催による昭和三十七年度宗像郡畜産品評会が開催されたが、出品頭数が百五十九頭で非常に盛大であった。

総合成績

一等　南郷農業協同組合
二等　吉武農業協同組合
三等　河東農業協同組合

この他、福岡県知事賞、県農林事務所長賞等数々の賞がそれぞれの家畜に与えられた。

町村往来

◇福間小唄、音頭入選者…福間町はさきに小唄と音頭を募集したが、このほど、音頭十七点、小唄六点の応募作品の審査の結果、小唄、音頭とも同町役場町民課長井本又七氏が一等に決まった。入選者つぎのとおり。【音頭】▽一等井本又七（福間町）▽二等岡本順三（千葉県）▽三等倉谷市郎（東京都）【小唄】▽一等井本又七（福間町）▽二等岡本順三（千葉県）▽三等広渡政照（福間町）

◇講演会…5日午後3時、玄海町田島小学校。出光興産社長出光佐三氏の講演。

◇養老施設慰問…郷土出身の出光興産社長、宗像町武丸真光寺仏教婦人会（立石ろせの会長）県酒造組合伊豆善次さんからこのほど宗像町緑風園に慰問品を贈った。

◇郡中学陸上競技大会…9日午前9時半。津屋崎中学校。

◇ライオンズ・クラブ例会…8日午後6時、津屋崎町正直亭　本年度の事業打ち合わせと卓話。

◇津屋崎中学校本館完成。…6月いらい工事中の本館の第一期工事がほとんどできあがった。同本館は鉄骨製二階建て一むねで一階が校長、職員室など。二階が理科、準備室などの計七室。第二期工事（保健室　普通教室など五つ）は来年度中に建てる予定。

◇郡赤ちゃんコンテスト…11日午前9時、宗像保健所。

◇西日本スケッチ大会…21日午前9時東郷小学校周辺、津屋崎海岸、大島、地島の四会場で開催。

◇学級編成打ち合わせ…教育庁出張所は15日玄海、津屋崎、大島、16日宗像、福間の日程で来年度の学級編成、特別学級の新設などで地元の各校長らと打ち合わせる。

◇岬小PTA研究会…15日午前9時『青少年の問題をみんなで考えよう』のテーマで分科会、午後はレクリエーションなど。

◇郡果樹現地研究大会…16日午前9時、玄海町池野釣山で現地視察、午後池野小学校で検討会を開く。郡内の果樹生産者など二百五十人が出席。

◇交通信号機点灯式…16日午前10時、宗像町東郷小学校前。

◇八所宮秋祭り…18、19日両日宗像町吉武、同宮。

◇鐘崎でタコ養殖…玄海町鐘崎漁協（細田御世蔵組合長、組合員二百五十人）ではタコ養殖を計画このほど県水産課の指導で、タコがめ四個をセメントで一ブロックに固めたものを二百五十個つくって鐘崎海岸に沈めた。

（西日本新聞より）

宗像会の皆様へ

宗像誌では、例年通り一月に宗像会会員の名簿を作製配布しております。

本年中に移動のあった方、或は移動された方を御存知の方は当社務所又は各宗像会へ御通知下さい。

尚、名簿には氏名、職業、現住所を記載致します。

新築落成

―生魚料理―

米屋旅館

宗像郡玄海町神湊
電話神湊一一一番

宗像伝説　その二十一

本木（もとぎ）の化物

郡の南方、上西郷の奥に「宗像の屋根」ともいわれている一際高い高原地帯があり、そこに本木という百、五六十戸の大きな部落があります。ここにその昔、化物が出たという古屋敷の跡がありますがこれはその節のお話であります。

化物が出るというので昔の人々は大層こわがって、一寸近所を通る者もない程でありました。

そこで或る時、村の元気な若者等が寄りく相談を重ね、なんとかして此の化者の正体をつかんで村の人々を安心させたいものだと愈々日時を定めて化物屋敷の古家に一夜の夜とぎをすることになりました。

夕方から総勢十四、五人、夫々村では一騎当千を気負った剛の者ばかりが集まりました。古家の土間に焚火をたいて、四方山の話に花が咲いて、そのうち十二時、一時になりましたが鼠一匹出ません。

「なんだ、人の噂はアテにはならんね、我々の威勢に恐れをなしたかな」

もう安心だと、一同がうとうとし始めました。と、間もなく土間にあった榾や古下駄などがひょこくと踊り出しました。中の一人がうすらぼんやり目を覚してこれを見ました。

「そうら、出たア」

一斉に目を覚した若者たちは手んでに棒ぎれを持って追いかけ廻しました。

今度は座敷の方で古掃やはたきが踊り出しました。幾ら打ち廻してもさっぱり手応えがないものですから、若者たちは段々恐しくなり出しました。一人失り、二人逃げして、ついに正体も見届けずに解散してしまいました。

さあ、忌々しくてたまりません。若者等は又々寄り合って相談しました。化物はどうやら狐か狸の仕業らしい、生捕りにしてやろうと相談が纏り、村外れに強ハジキの狐ワナを仕掛けました。

若者等は近くの小薮にかくれて待っていました。そこへ隣村の鉢たたき西念坊という坊さんが法事へ行っての帰り道、一杯気嫌で通りかかりました。坊さんは若者等がワナを仕掛けたということを噂で知っていました。この辺じゃないかな、どんなもんかな、と持った杖ででも当って見ればよかったものを、ふらふらな腰付でそーっと片足持上げて踏んだからたまりません。ハジキワナの鈎が外れて強バネが跳ね上り、坊さんは真逆様になりました。お土産も何も落花狼藉。見張っていた若者等、それかかったぞ、と大喜こび。

「コン畜生、長い間村人を困らせた古狸め、坊主に化けたってだまされはせんぞ、仇討ちだ」

やっちまえ、とばかり棍棒で打ちまくったものですからたまりません坊さん、苦しがって

「ば、ばかな俺は狸じゃない」叫べば叫ぶ程

「本物の狸だろう、尻尾を出せ、化けの皮をあらわせ」

ますます撲ります。坊主頭はデコボコになってしまいました。それでも尻尾が出ません。

「何だかおかしいぞ、少し手をゆるめてみろ」

引き下ろして見たところ、どうやら狸じゃないようだ。本物の坊主らしいぞ、ということになり、寺に運んで聞いてみたら、本当の坊さんだった。さあ大変。俺は知らないぞ、と若者らはみんな散り散りに逃げて行ってしまいました。このことは村中に拡がりました。本物を狸と間違えるようじゃ、本当に化物に化かされていたんじゃあるいまか、あれじゃ、化物屋敷の下駄踊りだって本当かどうか怪しいもんだ、と嘲われる計りです。

その後、坊主頭の瘤はおさまりましたが、坊さんの胸のうちはおさまりません。村の老人に頼んで断わりをいうて許して貰うのに一苦労したということです。

疑心暗鬼を生ず、とはよくいったものですね。（T）

宗像大社献詠
俳句作品集 (二)

津屋崎　久羽　文王
満々と瀬戸の大秋潮なりし

津屋崎　勝田　光一
紅葉のダム子と見る時は雲浮かべ

福間　城野　芠雨
突放の貨車来て露を押しつぶす

津屋崎　香立喜一郎
秋耕に獣医の単車陽を浴びる

津屋崎　占部　河童
秋天に風船とばす未知の果てに

大島　板矢くに子
島の肩ふんまえ月が今のぼる

津屋崎　渋田しげを
刈田暮れ公民館に灯がともる

津屋崎　阿部真佐子
横笛に沈む夕陽や獅子浮かぶ

福間　篠原とく美
妻恋うる月の喬木豁然たり

津屋崎　毛利　夜潮
たわたわと打つ波眩し秋桜

田野　山口　仁道
公文書難解梢の鵙猛ける

大井　安部　重郎
郷愁の田島詣でや曼珠沙華

津屋崎　大久保一仁
遠花火無人の校舎巡回す

津屋崎　西住喜三郎
秋の風孕ませ作業衣高く乾す

津屋崎　井浦　良介
万葉の歌碑を離れる法師蝉

八幡市　権田　新
バラ園に満ち人を誘い出す

大島　板矢久仁子
御供船もへさき揃へて秋波頭

古賀町　沖金　次郎
癒え近し草刈る鎌に陽をあつめ

縁風園　松本　善花
誕生の宴に酔いし菊日和

宗像信仰の化身　國学の大家　鈴木重胤大人

筑紫　豊

去る五月廿八日、文化財保護委員会の調査官田山方南氏と同行して、宗像神社所蔵古文書の調査を行ったときのことである。神社に、宗像信仰の化身ともいうべき、国学の大家鈴木重胤大人の自詠自書にかゝる、宗像三社それぞれに対する奉讃の長歌三幅があることを知った。

かって、昭和二十九年八月二日の『神社新報』に、「青玉の石」という題で、大人の篤信について書いたことのある私としては、このたび、このような大人の讃詠譚書された長歌三幅に接して、かねて恩師折口信夫先生に聴き、書物にも読んできた大人の真面目のあらたに懐しく想い出されるものがあり、感慨まことに切なるものがあった。

そこで、本紙編集氏の注文に応じて、大人について、若干の紹介文をものしたうえで、この長歌を掲げたく思うのであるが、大人の人物・学業については、故樹下快淳氏の『贈正五位鈴木重胤真人物』(昭和六年八月)を読むことが捷路であり、しかもこの書物は、大人に私淑するところの深かった著者が、大人の学徳顕彰のために、誠心誠意をもって、世人にうったえた珠玉の一編であって、読む者をしておのずから襟を正さしめるに足るものがある。よって私は、樹下氏の人物論中、大人の主要な経歴、および宗像信仰に関する部分その他を要約平易化し、いさゝかこれに交えそに、前掲の拙稿をもってして、前文となし、つぎに、このような大人の熱烈な信仰の表現ともいうべき、前記の長歌を紹介したいと思う。

○

宗像信仰の化身、国学の大家鈴木重胤大人は、淡路国津名郡仁井村の産、家は世々庄屋であった。父の重威は和漢の学に通じ、晩年は殊に皇典を研究して、『太元秘説』を著した。大人はその次男で、幼名を重三郎といゝ、後に、襲名して勝左衛門と称した。幼少のころ、大阪鴻池家に入って見習生となり、後神戸の豪商橋本藤右衛門に養われたが、この間に筆算・和歌・俳諧を始めとして謡曲・囲碁、茶湯・生花等の雑芸を仕込まれ、二十才のころには、すでに和歌俳諧の宗匠として一家をなすにいたった。

このころから、父の教えにしたがって皇典の攻究に志し、はじめ本居宣長の学説にあこがれ、さらに平田篤胤の学名を聞き天保二年(一三一年前)はるかに名簿を送って門人となった。ついで大人は、大阪出にて、門人をとり、和歌を教えるかたわら、皇典の講究に熱中した。

ときに、雲州松江に岡部東平という国学者があり、大人は東平の評判を伝え聞き、遥かにその門を叩いて教えを受け、議論を戦わしたが、大人の学識は、まだ東平に及ばなかった。そこで、一年の後、また東平を訪ねて論戦を試みたが、なお及ばなかった。不屈の大人は、またその翌年、三度東平に会って、議論を交したが、このき東平は、大人の学問に忠実であることと、その進歩の速やかなことに驚嘆し、大いに大人を激励したという逸話もある。

大人は国学者として有名になったが、定まった師匠がなく、諸学者の門を叩いては自学自修したのであった。ところが、津和野の大国隆正が、江戸で火災にあい、大阪に来て塾を開いたときから、大人は大いに隆正の学風の影響をうけたのであった。しかし、大人は、皇学の師としては、やはり、当代篤胤の右に出るものはないと信じ、親しく篤胤の膝下にあって学びたいと望んだ。とはいえ大人は、老母を独り郷里に見捨てゝ、遠く江戸に遊学するのに忍びなかった。

ところが、かねてから篤胤の学説を嫌っていた幕府が、天保十一年(一二二年前)『天朝無窮暦』の著あるにいたって、著述を禁じ帰滞を命じたので、篤胤は、やがて秋田に帰臥したということを聞いた大人は、郷里の母堂の許をえて、秋田への旅に上った。時に天保十四年八月。大人はまず京都に上って知友に別れを告げ、且つ、内大臣花山院家厚の手引によって内侍所の参拝を許され、あまつさえ温明殿の大御鈴と大御ぐしの恩賜をうけ、北越の山河を凌いで秋田にたどり着いたが、その日は十月晦で、奇しく悲しくも、篤胤殁して、すでに五十日祭にあたっていた。落胆した大人は、やむなく平田鉄胤を介して、篤胤の霊前において弟子の礼を捧げたのであった。(つづく)

(宗像大神々額)

放生会をかえりみて

宗像大社の秋季大祭が去る十月一日より、三日間に亘って斎行せられた。この祭は俗に田島放生会とも宗像放生会とも呼ばれている。放生会とは、元来生きとし生けるものをこの日放ちやる事で、八幡宮放生会として盛んに行なわれるようになったのは、千数百年の昔、養老年間からの事である。

宗像放生会は平安の中期貞元元年、時の大宮司宗像氏経によって始められたと伝えられる。爾来今日に至る迄、連綿としてこの祭礼が続いた事は、郡民の生活の一節となり、血肉となって融け込んで来たからに他ならない。時代によっていろいろの変遷はあろう。しかし、これが郡民の祭であった事は「栗市」「生姜市」「柿市」等の発達等によっても理解される。「足腰の立つものは皆田島様参り」とか「一年参らねば三年参られぬ」とかの言葉通り、老若男女を問わず皆参詣し、参詣者は境内及び田島沿道を埋め尽したと云われている。今年の放生会も境内の雑踏は相当なものであったが、参詣者が以前程この境内に永く留まらなくなった。これはここ数年間の交通機関の発達とマスコミの普及による所が大きい。

九州地方の都市周辺の各社の放生会が以前程賑いを呈せず年々縮少してゆく傾向は注目に価する。身近な例として、八女市福島八幡の歌とハナシにつれて踊る全国に類のない郷土芸能である「灯籠人形」は、百九十余年の伝統をもっていたが、人手不足の為中止されたと聞く。又、宗像大社の宮相撲も、永い歴史をもっており、宗像郡一円はもとより門司周辺からも見物客が押しかけたと云われている。この伝統ある相撲も廃止され、郡内中学校対抗の相撲大会に変わってしまった。このような伝統ある諸行事が消えゆく事は誠に惜しい事である。

しかし、ここに我々が看過し得ぬ事は、祭に附随する諸行事にのみ関心を持ち、放生会の祭の意味について考えてみようともしない人々が少なくない事である。これらの人々は諸行事が衰退すれば、もはや参詣しなくなるであろう。昔は日用品の数々を此の期間に購入する習わして、必要欠くべからざるものであったが、現在ではそれ程の意味を持たなくなった。従って購買力は少なくなり、その結果、露店等は次第に減少し、これを目当てに参集した人々も減ると云う循環を繰返す事になる。

幸い宗像郡は神郡の称にふさわしく、他の放生会に於けるようなこの傾向が顕著ではない。

秋の大祭は、五穀の豊穣を祝い之を神に感謝する祭であり、之に附随する神賑行事や、市等はあくまでも祭りの所産なのである。この本末を転倒してはならない。

我々は宗像放生会を単なる生憐れみの日に終らせず、自然に感謝し、又自然に生きる事を考える日と解したい。自然に生きるとは、無理のない調和のとれた生活を意味する。我々の祖先は自然の美しさ、清らかさの中に、一つの生活の知恵を発見した。これは四季折々の移り変わりの時期に区切りをつける事であった。今まで歩んで来た生活をふり返り、又将来を考える、この折り目〳〵が、正月であり、春、夏の祭りであり、六月大祓であり、秋祭りであった。秋の放生会は、取り入れを控えて、豊穣を祝い、神々に感謝すると共に、後二月を残して今年は暮れてゆく事を静かに反省するところのものであった。時代は移り変わる。飽く迄も古式を失わず、然も新時代に即して生き〳〵と活動する神社としての祭を育てて行きたいものである。

白雲先生の怪気炎 (其の二)
虎の皮とかまぼこの皮

「とう〳〵来ましたネ」院長の歓迎の辞はこれだった。こゝは旧陸軍病院をそのまゝ引継いだオンボロの国立C病院の院長室。五年前に入院した時から、再三胃袋の切開手術をすゝめられたにもかゝわらず、その都度適宜の遁辞を案じて逃げて来たが、それだけで傷だらけのエンジンが自然良能の妙術で快調に復ろう筈もなく、遂に逃げ切れないと悟った犯人の自首となったのである。

この病院には既に何度か診察の記録を残していること故、数日を経ずして断罪と観念していたが、血液はじめ内臓の諸検査が綿密に繰り返されて十日を過ぎても手術室への呼出しがない。見舞に来た友人が「ぐずついて又逃げるつもりか」と笑う。「今度は男らしく自首に及んだのだからネ、断罪は覚悟の上だ」と、上りもせぬ男ぶりを聊か見てもらう様な返事。

消化器管の検査の中で一般の患者が最も嫌がるのは、胃袋にゴム管や超小型撮影器を挿入する作業である。ゴム管をのどに通す苦しさに、もう死んでもよいからそれはやめて欲しいと申出た者もいる。ところがこれがわが輩にとっては、嬉しくはないがさほど苦痛でもない。平気で敏速に自分の手で医師の注文通りにのどを通す。医師が驚いて最大級の賞詞をくれる。この頃はやりのコンクールなら、これぞまさにのど自慢第一位だろう。へんなことに優秀な技能(?)を発揮したものだ、これは馬鹿々々しくて土産話にもならぬと苦笑する。

明朝手術をすると院長直接の通告。それが九月十八日。曽て蘆溝橋一発の銃声に祖国の運命を大きく狂わしはじめた日だ。断罪の胃袋も大陸の戦場生活の名残。因果はめぐる、何だか古い芝居のせりふが出そうなところで胸のおちつきを再確認しなければならなくなった。

わが輩は常人とは体温血圧その他著しく違う異常体質だから、意識を回復せぬまゝあの世へ直行する虞も多分にあると聞いている。

問題は意識がないから苦痛もないのだが、朦朧たる頭脳がとんでもないうわごとを口走らせることで、これが少々心配になってきた。入院前に同病の先輩諸氏から聞いたうわごとの種々相が気に懸かってきた。わが輩も寝ごとうわごとは人後に落ちぬ経歴を持っている。

東都の宿で放った足利の大軍砲撃のそれは兎も角、「仙崎のかまぼこは皮がうまい」と老妻を驚かした最近のヒットに至ってはまさに汗顔の至り。

虎は死して皮を残す。わが輩は死してかまぼこの皮を残したのでは知人の笑い草。いさゝか残念に過ぎる。

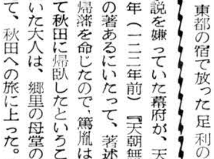
優れた人物には立派な辞世がある「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」病床発熱の中に芭蕉の佳吟。「七生報国」楠氏最期の切願。後世に伝えられる虎の皮など及びもつかぬが、さりとてかまぼこの皮はご免蒙りたいと念じつゝ前夜を眠った。

胃袋はレントゲン観察以上の荒廃ぶりで予定通り体外へ追放された。その代用品は将来自家製を待つ以外に道はなく、腸の一部がこれを担当する見込で手術は終った。然し厄介な異常体質は果せるかな常人の経過とは違う兆候を示し始め、まる二昼夜正気はなく死線を彷徨するに至った。院長も或はと予想した変調が現れてきたので、老妻を納得させて翌夜再手術を決行。近隣の病室では医師数名かゝりきりの緊急手当次いで夜間の手術室送還と只ならぬ気配に、種々のデマが飛んでいたとか。「あの白髪さんはダメだ」「ピンセットを腹の中に置き忘れたのだ」等々。

あの世直行は中止となった。三日目から正気のエンジンが動き始めた。そこまでの言動には記憶がない。附添って看護に専念してくれた人達に癇癪を起して少からぬ迷惑をかけたことがわかったが、心配したかまぼこの皮も出なかったし、世人を感動させるような虎の皮も残さなかったらしい。

わが病棟の前庭に薬瓶を配列して花園が造られている。誰のいたずらか、その中に胃袋の形を薬瓶でふちどった一角がある。「あの胃袋花園のあまり景色のよくない菊一輪は、さしずめ貴方の表現か」と看護婦を笑わせたが、こちらは腹にこたえて笑えない。退屈は新しい病を呼び起す。やむなくまだ許されぬ散歩に出たところ院長。「この病院環境は良いでしょう」と。再手術の当夜は自ら院内残留、わが輩の危機を救ったこの内臓外科の権威は何事もなかったかのように悠々秋空を仰いでいた。わが輩はふと手術前夜のかまぼこの皮を思い出した。死生の間に入る前の浅智慧と愚劣さを悔いる気持が湧き起った。そして静かに去りゆく院長のうしろ姿を見送って、名医の片鱗も見せない名医がわが輩の別の病源を癒してくれた気がした。

「おまえの辞世はかまぼこの皮でよいのだ。ウソの皮を残すよりはるかに人間らしいのだ」と。



三大電報

天野健一

一八七六年(明治九年)、熊本に神風連と云う暴徒が蜂起して熊本鎮台を取り囲んだ(此の暴動は西南戦争に関連している)。時の司令種田少将は、愛妾小方を左小脇にひき抱え、銘刀関の兼光を引き抜いて敵陣に切り込み(筆者は若かりし頃壮士芝居で之を見た)彼は壮烈なる戦死を遂げる、小方は難を逃れて之を友軍に知らせた、その時打った電報「ダンナハイケナイアタシハテキズ」主人は死んで妾は負傷した。このイケナイと云う文句が非常に文と魅力があって、死をイケナイで片付けた処が文才ありと云う事で、後に彼女は文学芸者として騒がれたのである。

黒田清隆が総理であった時西郷従道が逓信大臣で、この西郷が民情視察に北海道に渡って江差に着いた、その晩酒宴を張ったがその時に長文の電報が内閣から来た、開いて見ると日本の船が対馬沖で韓国軍艦より砲撃を受けた、と云うので内閣は大騒ぎ、黒田首班は閣僚を集めて直ちに韓国撃つべし、と強硬に主張した。他の大臣連中は折が折だけに今はその機に非ずと之に反論したが、黒田がどうしても聞き入れない、黒田曰く諸公が反対するなら俺が軍艦を出すと云うので、困った閣僚は西郷に急遽帰京を促す電報を打った。

西郷は酒席に硯と筆をとり寄せてこう書いて返電を認めた「マトマルモノナラマトメテオクレ」之は江差芸者がその時歌った江差し追分の唄の中に(纒まるものなら纒めてお呉れ嫌で別れた仲じゃないじゃないか)と云う一節があったので之にもじって黒田に送ったのだ、この一文で征韓が止んだと云う、宴に奇抜で他愛ない一幕であった。黒田は人も知る酒豪と無鉄砲で通った男だが西郷には一目置いていた、当時黒田を諫める者は西郷だけであったのだ。

「タダイマチヤクタン」此の電文は皆さんも御承知であろうと思うが、明治の初め筑豊地方には文筆に疎い炭坑主が幾人も現われたのだが、彼等は金に糸目をつけず色々の慾望を満したが、中には政治に打って出て衆議院議員となった人もあった。その中の某氏が国会召集で東京に着いたとき上記の電報を郷里に打った。炭坑はどうにか炭探して坑脈に着けば大成功と云う事になるので着炭と云う言葉は仲々に重要なものであった。某氏は着京を着炭とやってのけた。着炭代議士と云われたものである。

×　×　×